

マニア救う窓口



カメラ修理のユー・シー・エス



葛飾区民記者・かつしかPPクラブ

隅田 昭

まえがき



葛飾区堀切で営業する『株式会社ユー・シー・エス』は1983年に創業し、今年で36年を迎える。

創業当時は一眼レフの開発競争がすさまじく、どこの町にも写真を現像するショップや、高級カメラを下取りしたり、修理したりする店舗でひしめいていた。

しかしデジタル化の大波は、予想をはるかに超えるスピードで、それらをのみ込んでしまった。

ユー・シー・エスは、いままもアナログカメラマニアの要求に応えるべく、地道に修理・販売を継続している、貴重な存在である。

(本文では株式会社ユー・シー・エスをUCSと略称にします)

もくじ

1. まえがき
2. カメラの歴史は長い
3. 修理のプロは見抜く
4. マニアの心は無限大
5. 厚い信頼は努力の証
6. デジタルは極小単位
7. アナログ回帰が来る



カメラの歴史は長い



カメラの歴史は意外に古く、西暦1021年にアラブの科学者『イブン・アル・ハイサム』が制作した、ピンホールカメラと言われている。

もっとも近年まで写真として保存する技術がなく、映画館のようにカメラの暗幕に人間が入り、映した画像を楽しむだけの手段だった。

写真として保存する技術は、1826年にフランスで『ニエプス』が、銀とチョークの混合物に光源をあて、撮影したものが最初である。

フィルムの発明はアメリカ人の発明家『ジョージ・イーストマン』で、1884年に特許を取得した後に、『コダック』社を設立する。



銀塩カメラはドイツのエンジニア『オスカー・バルナック』が、1914年に24×36mm版の試作機を発表し、後に『ライカ』社を創立した。



我が国では1936年にキヤノンが、35mmレンジファインダーカメラを開発した。現在は日本製カメラが世界じゅうを席巻しているが、朝鮮戦争で駐留した米兵が、ニコン製などを本国に持ち帰ったのがキッカケである。

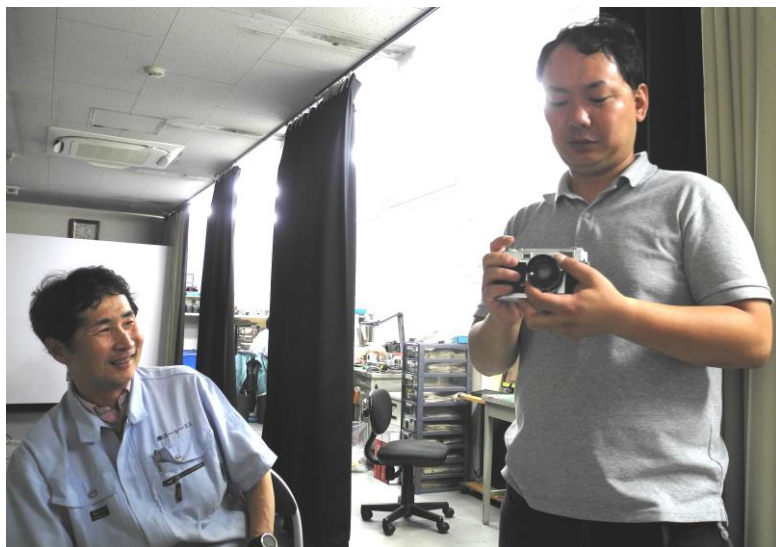
UCSの1階では、懐かしいカメラが展示・販売されている。いまでも多くの愛用機が持ちこまれ、修理される日を待ちわびていた。

修理のプロは見抜く

UCSは1階が下取りや修理のサービスカウンター、2階がアナログ銀塩カメラやレンズの修理フロア、そして3階が最新のデジタル一眼レフ関連の修理フロアに分かれている。取材に同行していただいたのは、テクニカルサブマネージャーの『飯間 司』さん（写真左）だ。

ちなみに社名の由来だが、『Universal Camera Service』（総合・カメラ・修理）の頭文字からとったと聞かされた。

カメラ修理代行店として多くの実績を誇り、都内でも希有の存在で、特にキヤノンとニコンからは、認定修理店の称号を獲得している。



創業者の『渡辺 勝明』氏は、廃業した『ペトリ』社でエンジニアをしていた経験を持ち、現在でもペトリ製は全機種 of 修理を扱う。

メーカーからの技術指導も受けており、腕に自信のあるベテランスタッフが揃っている。ほとんどが入社してから技術をマスタしたようだ。

記者も父が遺品で残した古いカメラを持参したが、わずか数分で「シャッターが切れません。落として修理をあきらめたと思います。グリスも減って、内部にカビも生えてます」と、笑顔で見抜かれてしまった。

マニアの心は無量大

マニュアルレンズは部品の在庫も少なくなっているが、UCSでは顧客の要望に応えられるよう、常に最大限の努力を重ねている。

カメラに使われている極小のネジは、メーカーや機種、レンズによって様々な種類が存在する。それだけでも膨大な数になるが、揃わない場合はネットなどを駆使して、できる限り規格品を見つけるそうだ。

カメラは時計やバッグと同様、愛玩品にちかい存在だ。自分や家族が大切に使っているので、「お金をかけても直したい」と頼る顧客が多い。



上の写真は最終調整のピント合わせ用に、無量大でチャートを目視する『コリメーター』と呼ばれる機材である。他にも投影器2台があり、企業秘密で撮影NGだったが、キヤノンから技術指導も受けている。細かいチャート表が記載され、精密なチェックに欠かせないマシンだ。

同行していただいた飯間さんから、「マニュアルレンズのよいところは、手の感触で調子を確認されるし、グリスも適度に回るので自分でメンテナンスできました。でも最近のオートフォーカスは、電池で動かすので、定期的に操作していないと不具合をおこします」と教わった。

厚い信頼は努力の証



修理に持ち込む顧客は、多くがアマチュアの男性マニアである。ただ、UCSではキヤノンのメンテナンスパックを実施しており、定期的にボディや交換レンズを保守・点検するサービスが好評だ。そのため、セミプロや商業カメラマンの固定客からも、あつい信頼を得ている。

ニコンの「Fシリーズ」は、長期に製造されたのでファンも多い。一番人気の「F3」は2年前に部品製造が停止されたが、ストックもわずかに残っている。ニコン好きなら今がラストチャンスかもしれない。

UCSに持ち込まれる原因の多くが、撮影中に落下させたためだ。なかには修理代が高くつくのを恐れ、「ぼくは一度も、落としたミスなどありません！」と意地をはるマニアもいるらしい。だが、記者も経験したとおり、修理のプロは触った数分後には判別できてしまう。

一眼レフは男性が凝った撮影に使うというのが定番だったが、最近は若い女性でも気軽に、重量級の機材を使いこなしている。

「女性マニアというと、花やペット、スイーツをカメラに収めるのかとばかり考えていましたが、そうでもないですね」と飯間さんが呟く。



プロ用の超望遠AFレンズを駆使した、プロバスケット選手の追っかけをしている熱血マニアからも、以前に修理依頼を受けたそうだ。

デジタルは極小単位



2階は投影器を除き撮影できたが、3階のデジタル一眼修理フロアは遠景のみ許可され、作業風景はNGだった。

アナログカメラは最終のピント合わせを手で行っており、経験豊富な技術者が目視で調整する。しかしデジタルカメラは、最新鋭の『マイクロメーター』と呼ばれる電子機器を使う。

レンズマウントと本体のイメージセンサーを、レーザー光線で照射し、距離をデジタルの数値で測定するのだ。

まさに極小単位の検査であり、研究室で実験をしている雰囲気だった。

記者は「思い出のあるコンパクトカメラや、最近流行しているミラーレス一眼の修理はされていないのですか？」と飯間さんに尋ねた。

「昔の小型機でどうしても修理したいというご要望なら、部品が揃えば承れます。ただ高額なので、新品を買われたほうが断然安いです。ミラーレスは2020年から、キヤノン製品の取り扱いを始めます。いつの時代も何が残るのか、誰にも予想ができません。私たちはお客さまの要望に応えるよう、現状で精一杯尽くすしかない。そう考えています」

オーディオの世界では、最近レコードやカセットテープに興味を持つ、若い世代が増えている。

通勤電車のなかでも、スマホではなく、紙の小説やマンガを手にする人も多くなった。

記者は古き良き時代の『アナログ』が復権する予兆を感じた。



アナログ回帰が来る



◆ 写真・文章・編集：隅田 昭

◆ 取材：2019年8月 2日

◆ 発行：2019年8月25日

本冊子の一部あるいは全部を無断で複写複製することは、
法律で認められた場合を除き、著作権の侵害となります。